



東日本大震災の避難所で実際に起きた事例 と繰り返さないための工夫



このようなことがありました

事例から学ぶ患者の取り組み

事例から学ぶ運営側の取り組み

安心安全な避難所とするために

事例 1 食物アレルギー



ボランティアの方からいただいた表示なしの菓子にアレルギーが含まれていて、摂取後嘔吐した。
(7歳男子・親への確認がなかった)

子どもが食品をもらったら必ず保護者に確認してから食べるよう習慣づけましょう。
ビブスやサインプレートがあれば活用しましょう。



食物アレルギーの人はいませんか?と運営側からも声をかけてください。そうすると患者も申し易くなります。

食品を配る時には食物アレルギーの確認をするようにしてください。幼い子どもではっきりしない場合は保護者に確認しましょう。

事例 2 食物アレルギー



ある食べ物を「アレルギーがあるので食べられない」と言ったら「こんな時に贅沢を言うな」と避難所の担当者に怒られた。



日頃から医師の診断に基づき「除去が必要な食品」を確定しておきます。食品配布時には必ず申し出ましょう。

アレルギー患者は災害時の「要配慮者」です。食品の配布時には食物アレルギー患者へ配慮しましょう

食物アレルギー患者にとって食品の選択は好き嫌いや贅沢ではありません。命を守るための必要な選択だということを皆で理解しましょう。



事例 3 食物アレルギー



配給の時に「アレルギーがあるので成分表示なども見せてほしい」と何度もお願いしたが嫌な顔をされて困った。

アレルギー患者は「要配慮者」です。避難所や行政の担当者へ必要な情報の提供を依頼しましょう。

食物アレルギーの患者や保護者が「食べられるかどうか」判断できる情報を提供することで命を守ります。

患者が判断できるように、食事の提供や炊き出しの際には原材料の表示を行い、加工食品の原材料表示(包材)や調味料類は見るところに置きましょう(国の指針)



東日本大震災の避難所で実際に起きた事例 と繰り返さないための工夫



このようなことがありました

事例から学ぶ患者の取り組み

事例から学ぶ運営側の取り組み

安心安全な避難所とするために

事例 4 気管支喘息



避難所などのホコリが多い環境で
ぜん息が悪化したことを感染症と
間違われ、避難所にいらなくなっ
た。

咳は周囲の人を不安にします。
感染症ではなく**ぜん息**だと明確
に伝えて理解を得ましょう。
サインプレートやゼッケンの活用
も有効です。

ぜん息
があります

ホコリやストレスでぜん息が悪
化することがあります。
避難所内の適切な居場所等の
配慮をお願いします。



患者が吸入器等の医療機器の電
源を必要とする際には優先して電
源を確保します。ぜん息症状が続
く場合は医療機関の受診が必要
です。

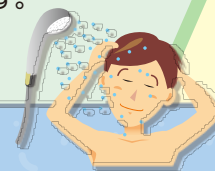
事例 5 アトピー性皮膚炎



シャワーや入浴が限られる環境で
アトピー性皮膚炎が悪化したこと
が理解されず「汚い」と言われた。

シャワーや入浴は治療の一部で
す。利用できずに困った時は、避
難所や行政の担当者に相談しま
しょう。

患者がシャワーや入浴ができる
ように配慮しましょう。
清拭・塗り薬を塗る場所や目隠
しがあると助かります。



アトピー性皮膚炎は悪化すると皮
膚が赤くなりかゆみを伴いますが、
人から人にうつる病気ではありま
せん。周囲の正しい理解が患者の
支えとなります。

事例 6 処方薬



普段飲んでいる薬がなくなってし
まった。
定期的に使っている薬の名前を忘
れてしまった。

日頃から余裕をもって処方して
もらい、お薬手帳の記載内容は
スマホでも撮影しておきましょ
う。遠慮なく「薬がない」と声を
あげましょう。

「薬が足りていますか」と声をか
けましょう。
救護所や医療機関との連携体
制を確認しましょう。

避難所での適切な情報の収集(ア
セスメント)と保健・医療との連
携態勢で、患者の健康を守りま
しょう。